

小・中学生の喫煙に関する意識と行動

—地域における喫煙防止活動のために—

A Survey on Smoking Among Primary and Junior-High-School Students

—For the Prevention of Smoking in One Town—

辻雅善 角田正史 鈴木礼子 鈴木恵子 上野文彌 相澤好治

(Masayoshi TSUJI Masashi TSUNODA Reiko SUZUKI

Keiko SUZUKI Bunya UENO Yoshiharu AIZAWA)

キーワード：喫煙、小・中学生、喫煙防止

要旨

【目的】未成年の喫煙の低年齢化に伴い、その対策の基礎資料を得るため、ひとつの町において小・中学生及びその保護者を対象に喫煙経験に至る要因を探ることを目的とした。

【方法】福島県のA町における小・中学生及びその保護者を対象に無記名質問紙票方式にて実施した。調査内容として、小・中学生について喫煙経験の有無、将来の喫煙意志、喫煙の知識、周囲の喫煙等、保護者には受動喫煙の配慮等について尋ねた。

【結果】過去に一回でも喫煙したことがある者は、小学生男子で17.0%、女子で3.2%であり、中学生男子で22.7%、女子で4.1%であった。中学生で男女共に1年生から2年生にかけて顕著な上昇が見られた。小学生について、将来、喫煙意志のある者は喫煙経験ありの児童で25.0%であり、なしの児童の7.9%と比べ有意に高かった。分煙を知らない及びたばこに害があると思わない児童は、喫煙経験ありの者がなしの者より有意に高かった。周囲の喫煙については、母親の喫煙の割合が喫煙ありの児童がなしの児童より有意に高かった。中学生では、将来、喫煙意志のある者は喫煙経験ありの男子生徒で42.9%であり、なしの生徒の7.1%と比べ有意に高かった。女子生徒でも喫煙経験ありで33.3%であり、なしの生徒の2.4%と比べ有意に高かった。たばこの煙が嫌ではない、たばこに害があると思わない共に、女子生徒で喫煙経験ありの者がなしの者に比べ有意に高かった。父親が喫煙している割合は喫煙ありの男子生徒がなしの男子生徒より有意に高かった。喫煙する父親は受動喫煙に対する配慮について、喫煙しない父親に比べ有意に低かった。

【考察】喫煙経験が中学1年生から中学2年生にかけて顕著に上昇しており、喫煙経験者の将来の喫煙意志が高かった。以上から、早期の教育が必要であることが示唆された。喫煙をしている親ほど受動喫煙に対する配慮が低く、小・中学生の喫煙対策には親の教育も必要で、喫煙対策の体制を学校教育だけでなく、地域ぐるみでの教育等を実施していく必要がある。

I. 緒言

たばこの煙には、判明しているだけで4,000種類以上の化学物質が含まれており、そのうち60種類以上には発がん物質及び発がん促進物質が含まれている（国民衛生の動向, 2007）。そのため、喫煙者では肺がんをはじめとする各種のがん、虚血性心疾患、肺気腫等の疾患の危険性が増大する。平成18年の日本たばこ産業株式会社の全国たばこ喫煙者率調査によると、わが国の20歳以上の喫煙者率は男性41.3%、女性12.4%であり、喫煙者率は、男性では低下傾向にあるが、先進諸国と比較すると高い率を示しており、最も取り組むべき公衆衛生上の課題といえる。一方、女性の喫煙者率は全体で見ると横ばい傾向であるが、20歳代、30歳代の若い女性の喫煙者率が近年上昇していることが問題視されている。

喫煙の習慣は未成年から始まることは多くの研究から明らかであり、米国では1989年に中学2年生段階で半分以上がたばこを吸ったことがあるとし（U.S. Department of Health and Human Services, 1992）、福島県北部での職域の調査でも13歳から20歳で喫煙を開始したという報告がある（草野, 2002）。厚生労働省は、「健康日本21」における喫煙対策として「未成年の喫煙をなくす」ことを重要な課題として挙げている（藤田, 2006）。特に未成年の喫煙の低年齢化が問題として取り上げられており、小・中学生の段階から喫煙対策に取り組むべきである。

小・中学生において、喫煙の一回の経験が、将来の喫煙の経験につながる可能性があると考えられ、どれくらいの喫煙経験者がいるのかを把握する必要がある。また、現状把握と共に児童・生徒時に喫煙を経験することによって、将来たばこを吸うという意志が本当に増える可能性があるか、その検討も必要である。さらに、どのような背景及び要因が関連して喫煙を経験するのかについても把握することが重要であると考えられる。

本研究は、未成年の喫煙の低年齢化に伴い、その対象をひとつの町の小・中学生に的を絞り、喫煙の有無等を調査し現状を把握し、喫煙経験に至る要因を探ることを目的とした。その結果、地域において、保健所等を中心に未成年の喫煙対策を進めるための、その基礎資料を得ることができると考え調査を行った。

II. 方法

1. 調査期間

福島県県北保健所管内のA町における全ての小・中学校、即ち、小学校4校の5・6年生247名、中学校1校の1・2・3年生453名、その保護者（重複を除いた実家庭数、小学生126、中学生397）を対象に無記名質問紙票方式にて実施した。調査期間は平成12年11月27日から12月1日で、教育委員会を通して各学校に質問紙票を依頼した。

2. 調査方法

小・中学生への質問紙調査は、担任が各教室において実施した。調査前に喫煙に関する指導は行わず、質問紙票の配布後、記入時には担任は教室の外に待機し、その間に小・中学生は無記

名自記式で記入した。記入終了後、直接、養護教諭に渡し回収した。保護者には児童・生徒を通して配布し、返信用封筒に封をして児童・生徒を通しての提出とした。有効回答数をもとにした回収率は、小学生98.0% (242/247)、中学生96.7% (438/453)であった。保護者の回収率は、小学生の父親77.0% (97/126)、母親80.2% (101/126)、中学生の父親80.1% (318/397)、母親85.6% (340/397)であった。

3. 調査内容

小・中学生に対する質問紙票の調査内容は、本人の喫煙状況及び経験に関して、小学生に対しては、「あなたは今までにたばこを一口でも吸ったことがありますか?」という選択肢を、中学生に対しては、たばこを「吸ったことがない」、「過去に吸ったことはあるが今は吸っていない」、「ときどき吸っている」、「習慣的に吸っている」の選択肢を設けた。その他、たばこについて、将来、自分がたばこを吸うと思うか、たばこの煙を嫌だと感じる（「嫌だと感じない」を集計）か、分煙について（「知っている」、「聞いたことはある」、「知らない」の選択肢で「知らない」を集計）、たばこの害について知識はある（「たばこに害があると思わない」等）か、家族（父親、母親、兄弟）・友人の喫煙状況等の選択肢を設けた。また、生活習慣として朝食の摂取状況（「毎日食べる」を集計）等の選択肢も設けた。保護者（父親、母親）に対する質問紙票調査の内容は、習慣的にたばこを吸うかどうかの質問に対して、「毎日吸っている」、「毎日ではないが、週1回以上吸っている」、「以前は吸っていたが、現在は吸っていない」、「以前から吸わない」という選択肢を設けた。「毎日吸っている」及び「毎日ではないが、週に1回以上吸っている」を現在の喫煙者とした。受動喫煙については、公共交通機関では禁煙席を利用するか等を尋ねた。他に、たばこが身体に与える害（「健康に悪い影響があると思う」を集計）、行政への要望（「公共施設での禁煙を望む」「行政の禁煙相談を望む」等）等の選択肢も設けた。

4. 統計解析

質問紙票回収後、それぞれの質問紙票について単純集計を行った。小・中学生に関しては男女別に集計、保護者は父母に分けて集計した。さらに、小・中学生については、小学生は男女一緒に、中学生は男女別に、喫煙経験の有無と、将来自分がたばこを吸うと思うか、たばこの煙が気にならない、たばこに関する知識等についてクロス集計を行った。保護者の質問紙票では、父母それぞれに保護者の喫煙者・非喫煙者と受動喫煙の防止等についてクロス集計を行った。検定法には、 χ^2 検定及びFisherの直接確率法を用いた。統計ソフトは、Statview version 5.0 (SAS Institute Inc., Cary, NC) を用いた。

Ⅲ. 結果

1. 小・中学生の喫煙経験の有無

喫煙経験がある小・中学生について、今まで一回でも喫煙をしたことがある者は、小学生男子児童17.0%、女子児童3.2%、中学生男子生徒22.7%、女子生徒4.1%であった。学年別にみた結果を図1に示した。小学生男子児童は5年生の方が高い割合を示し、女子児童でも同様に5年生の方が高い割合を示した。また、中学生については、女子生徒では2、3年生で喫煙経験がある者の割合が1年生より高く、男子生徒では学年が進むにつれ喫煙経験のある者の割合が高くなった。なお、中学生男子に「ときどき吸っている」が3名、「習慣的に吸っている」が2名いた。

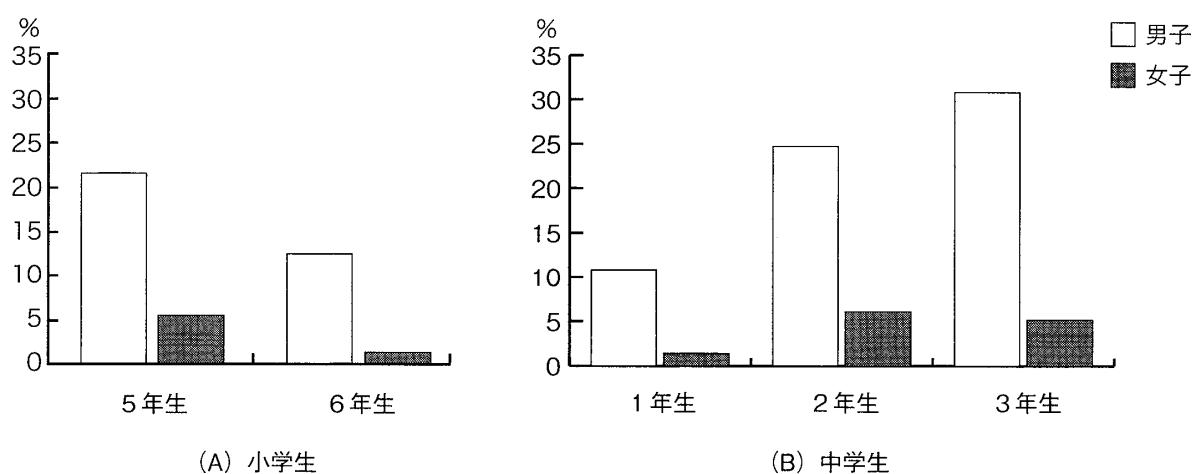


図1. 喫煙の経験が一回でもある小学生・中学生の割合

2. 小・中学生の喫煙意志、喫煙の知識、周囲の喫煙、朝食の毎日摂取等

小・中学生の将来の喫煙意志、喫煙の知識、周囲の喫煙、朝食の毎日摂取の有無についての単純集計を表1に示した。「将来たばこを吸うと思う」、「たばこの煙が嫌ではない」の設問では、小・中共に男子が女子より有意に高い割合を示した。「たばこの煙が嫌ではない」割合が、中学生では小学生の男女それぞれの2倍程度となった。しかし、「たばこに害があると思わない」の設問は、中学生になると男女共に割合が低く、中学生で男子が女子より有意に高かった。分煙についての知識は小・中学生共に低かった。また、「朝食を毎日食べる」割合は中学生で男子が女子より有意に高かった。

表1. 小・中学生の将来の喫煙意志、喫煙の知識、周囲の喫煙、生活習慣

(A) 小学生

	男子		女子		p 値
将来たばこを吸うと思う	15.5%	(17/110)	3.9%	(5/128)	0.0022
たばこの煙が嫌ではない	7.1%	(8/112)	1.6%	(2/127)	0.0488
分煙を知らない	76.1%	(86/113)	80.5%	(103/128)	0.4113
たばこに害があると思わない	10.6%	(12/113)	8.6%	(11/128)	0.5933
父親が喫煙	62.8%	(71/113)	59.8%	(76/127)	0.6352
母親が喫煙	8.8%	(10/113)	12.5%	(16/128)	0.3620
喫煙する友人あり	5.3%	(6/113)	0.8%	(1/128)	0.0532
朝食を毎日食べる	85.8%	(97/113)	85.2%	(109/128)	0.8804

(B) 中学生

	男子		女子		p 値
将来たばこを吸うと思う	15.1%	(33/220)	3.7%	(8/218)	<.0001
たばこの煙が嫌ではない	15.5%	(34/219)	3.7%	(8/218)	<.0001
分煙を知らない	88.8%	(190/214)	86.3%	(182/211)	0.4301
たばこに害があると思わない	6.0%	(13/218)	0.9%	(2/217)	0.0040
父親が喫煙	62.2%	(135/217)	58.4%	(125/214)	0.4200
母親が喫煙	13.2%	(29/220)	10.2%	(22/216)	0.3303
喫煙する友人あり	10.5%	(23/219)	6.5%	(14/216)	0.1328
朝食を毎日食べる	85.5%	(188/220)	77.5%	(169/218)	0.0325

注) 小学生男子 113 名、女子 128 名、中学生男子 220 名、女子 218 名であり、母数の足りないところは無回答者を除いている。

3. 小学生の喫煙経験の有無とその他の要因の関連

表2で小学生の喫煙経験の有無とその他の要因との関連について示した。喫煙経験のある児童が喫煙経験のない児童に比べて「将来たばこを吸うと思う」と答えた割合が有意に高かった。喫煙に関する知識の観点からみると、「分煙を知らない」と答えた児童の割合は、喫煙経験のある児童の方が喫煙経験のない児童より有意に低かった。また、喫煙経験のある児童は「たばこに害があると思わない」と答えた割合が、喫煙経験のない児童に比べ有意に高かった。家族の喫煙について、父親の喫煙率においては、喫煙経験のある児童と喫煙経験のない児童との間に有意な差は見られなかった。一方、母親の喫煙率は喫煙経験のある児童の方が喫煙経験のない児童より有意に高かった。また、児童の友人の喫煙については、喫煙経験のある児童では、喫煙

経験のない児童より友人に喫煙者がいる割合が有意に高かった。生活習慣の面から検討すると、喫煙経験のある児童は「朝食を毎日食べる」割合が、喫煙経験のない児童に比べて低かった。

表2. 小学生の喫煙経験と他の要因との関連性

	喫煙経験				p 値
	あり		なし		
将来たばこを吸うと思う	25.0%	(5/20)	7.9%	(17/216)	0.0295
たばこの煙が嫌ではない	9.1%	(2/23)	3.7%	(8/215)	0.2327
分煙を知らない	60.9%	(14/23)	80.1%	(173/216)	0.0337
たばこに害があると思わない	8.7%	(2/23)	0.9%	(2/214)	0.0058
父親が喫煙	60.9%	(14/23)	60.9%	(131/215)	0.9955
母親が喫煙	26.1%	(6/23)	9.3%	(20/216)	0.0137
喫煙する友人あり	13.0%	(3/23)	1.9%	(4/216)	0.0025
朝食を毎日食べる	73.9%	(17/23)	87.5%	(189/216)	0.0726

注) 喫煙経験ありの小学生 23 名、なしの小学生 216 名であり、母数の足りないところは無回答者を除いている。

4. 中学生の喫煙経験の有無とその他の要因の関連

中学生の喫煙経験の有無とその他の要因との関連について男女別に表3に示した。喫煙経験と自己の将来の喫煙像との関連では、喫煙経験のある生徒が喫煙経験のない生徒に比べて、男女共に「将来たばこを吸うと思う」と有意に高く回答した。また、喫煙経験のある男子生徒については、周囲で喫煙している人がいても「たばこの煙が嫌ではない」、「たばこに害があると思わない」割合が、喫煙経験のない生徒と比較して有意な差を認めなかったが、喫煙経験のある女子生徒については、「たばこの煙が嫌ではない」割合が喫煙経験のない生徒と比較して有意に高く、「たばこに害があると思わない」と回答した割合は喫煙経験のない生徒に比べ有意に低い割合を示した。家族の喫煙状況で父親の喫煙率については、喫煙経験のある男子生徒が喫煙経験のない生徒より有意に高い割合を示した。一方、女子生徒では有意な差は見られなかった。母親の喫煙率については、喫煙経験のある生徒と喫煙経験のない生徒との間に、男女共に両群の間に有意な差は見られなかった。また、生徒の友人については、男女共に喫煙経験のある生徒が喫煙する友人がいる割合が有意に高く、女性ではその差が大きかった。生活習慣について、「朝食を毎日食べる」割合が喫煙経験のある男子生徒で有意に低かった。一方、女子生徒では、喫煙経験によっても「朝食を毎日食べる」率には差がなかった。

表 3. 中学生の喫煙経験と他の要因との関連性 (男女別)

(A) 男子

	喫煙経験				p 値
	あり		なし		
将来たばこを吸うと思う	42.9%	(21/49)	7.1%	(12/169)	<.0001
たばこの煙が嫌ではない	20.4%	(10/49)	14.1%	(24/170)	0.2840
分煙を知らない	83.3%	(40/48)	90.4%	(150/166)	0.1741
たばこに害があると思わない	8.2%	(4/49)	5.3%	(4/169)	0.4602
父親が喫煙	79.2%	(38/48)	57.4%	(97/169)	0.0060
母親が喫煙	20.0%	(10/50)	11.2%	(19/170)	0.1050
喫煙する友人あり	22.4%	(11/49)	7.1%	(12/170)	0.0020
朝食を毎日食べる	76.0%	(38/50)	88.2%	(150/170)	0.0310

(B) 女子

	喫煙経験				p 値
	あり		なし		
将来たばこを吸うと思う	33.3%	(3/9)	2.4%	(5/208)	<.0001
たばこの煙が嫌ではない	22.2%	(2/9)	2.9%	(6/208)	0.0026
分煙を知らない	87.5%	(7/8)	86.1%	(174/202)	0.9128
たばこに害があると思わない	11.1%	(1/9)	0.5%	(1/207)	0.0011
父親が喫煙	66.7%	(6/9)	57.8%	(118/204)	0.5994
母親が喫煙	12.5%	(1/8)	9.7%	(20/207)	0.7908
喫煙する友人あり	44.4%	(4/9)	4.9%	(10/206)	<.0001
朝食を毎日食べる	66.7%	(6/9)	77.9%	(162/208)	0.4307

注) 喫煙経験ありの中学生男子 50 名、女子 9 名、喫煙経験なしの中学生男子 170 名、女子 208 名であり、母数の足りないところは無回答者を除いている。

5. 小・中学生の親の喫煙の有無とその他の要因の関連

保護者の親の受動喫煙に対する配慮、たばこの健康への影響、行政への要望について表 4 に小学生の父親・母親、表 5 に中学生の父親・母親について示した。受動喫煙に対する配慮について、「公共交通期間では禁煙席を利用」、「飲食店では禁煙席を利用」、「たばこを吸う人との同席・隣席を避ける」の全ての項目で、小・中学生の父親の喫煙者は非喫煙者に比べて有意に低い割合を示した。一方、母親は「たばこを吸う人との同席・隣席を避ける」に関して、小・中学生の母親の喫煙者が非喫煙者に比べ有意に低い割合を示したが、他の設問では有意な差は

見られなかった。たばこの健康への影響については、父親ではたばこが「健康に悪い影響があると思う」割合が、喫煙者の方が非喫煙者に比べて有意に低かった。行政への要望に関しては、小学生の父親において、「公共施設での禁煙を望む」、「禁煙相談を望む」割合が、喫煙者は非喫煙者と比較して有意に低かった。一方、小学生の母親においては有意な差は見られなかった。また、中学生の父親、母親では共に、「公共施設での禁煙を望む」、「禁煙相談を望む」割合が、喫煙者は非喫煙者と比較して有意に低かった。

表 4. 小学生の親の受動喫煙に対する配慮、たばこの健康への影響、行政への要望

(A) 父親

	喫煙者		非喫煙者		p 値
公共交通機関では禁煙席を利用	32.1%	(18/56)	52.5%	(21/40)	0.0453
飲食店では禁煙席を利用	21.4%	(12/56)	60.0%	(24/40)	<.0001
たばこを吸う人との同席・隣席を避ける	12.5%	(7/56)	60.0%	(24/40)	<.0001
健康に悪い影響があると思う	67.9%	(38/56)	85.4%	(35/41)	0.0484
公共施設での禁煙を望む	28.6%	(16/56)	61.5%	(24/39)	0.0014
行政の禁煙相談を望む	34.5%	(19/55)	66.7%	(26/39)	0.0021

(B) 母親

	喫煙者		非喫煙者		p 値
公共交通機関では禁煙席を利用	43.8%	(7/16)	44.7%	(38/85)	0.9437
飲食店では禁煙席を利用	50.0%	(8/16)	51.8%	(44/85)	0.8969
たばこを吸う人との同席・隣席を避ける	25.0%	(4/16)	52.9%	(45/85)	0.0402
健康に悪い影響があると思う	87.5%	(14/16)	97.6%	(83/85)	0.0562
公共施設での禁煙を望む	37.5%	(6/16)	59.5%	(50/84)	0.1038
行政の禁煙相談を望む	62.5%	(10/16)	70.6%	(60/85)	0.5199

注) 喫煙している父親 56 名、母親 16 名、喫煙していない父親 41 名、母親 85 名であり、母数の足りないところは無回答者を除いている。

表5. 中学生の親の受動喫煙に対する配慮、たばこの健康への影響、行政への要望

(A) 父親

	喫煙者		非喫煙者		p 値
公共交通機関では禁煙席を利用	26.5%	(50/189)	51.6%	(66/128)	<.0001
飲食店では禁煙席を利用	22.8%	(43/189)	58.6%	(75/128)	<.0001
たばこを吸う人との同席・隣席を避ける	13.8%	(26/189)	47.7%	(61/128)	<.0001
健康に悪い影響があると思う	62.2%	(117/188)	86.8%	(112/129)	<.0001
公共施設での禁煙を望む	29.7%	(55/185)	72.7%	(93/128)	<.0001
行政の禁煙相談を望む	47.3%	(88/186)	68.2%	(88/129)	0.0002

(B) 母親

	喫煙者		非喫煙者		p 値
公共交通機関では禁煙席を利用	35.1%	(13/37)	43.2%	(131/303)	0.3466
飲食店では禁煙席を利用	40.5%	(15/37)	53.5%	(162/303)	0.1374
たばこを吸う人との同席・隣席を避ける	27.0%	(10/37)	53.8%	(163/303)	0.0021
健康に悪い影響があると思う	78.4%	(29/37)	89.4%	(271/303)	0.0487
公共施設での禁煙を望む	30.6%	(11/36)	65.0%	(186/286)	<.0001
行政の禁煙相談を望む	47.2%	(17/36)	72.2%	(208/288)	0.0021

注) 喫煙している父親189名、母親37名、喫煙していない父親129名、母親303名であり、母数の足りないところは無回答者を除いている。

IV. 考察

本研究は教育委員会を通じて各学校に依頼したものであり、A町における全小・中学校で実施し高い回収率の回答を得、ひとつの町を代表する結果と考える。このことに加え、小・中学生、その親に対する記入時、回収方法の際の配慮によって回答の体面考慮によるバイアスは、かなり避けられたと考え、妥当性の高い結果を得ることができたと考え。

小・中学生で今まで1回でも喫煙したことがある者は、女子より男子の方が割合が高く、男子に対策の重点が置かれるべきという点は指摘できる。しかし、これはまた、日本の社会現状を反映したものに過ぎないとも考えられる。近年、若年女性の喫煙率の上昇が問題になっており、女子の指導も軽視すべきではないと考える。なお、女子児童の喫煙経験者は少ないため、今後の喫煙経験についての解析は、小学生については男女一緒にして行った。男子児童で小学校6年生より小学校5年生の方が、1回でも喫煙したと答えた割合が高い結果となったが、これは単に集団の差である可能性がある。一方、今回は体面考慮によるバイアスが、小学校6年生に、より強く働いた可能性もあり、実際は喫煙経験がある児童の割合はもっと高いのかもしれない。

れない。しかし、藤田の小学4年生から6年生を対象とした調査では、喫煙経験者率は男子5.3%、女子3.1%であった（藤田，2005）。対象学年の違いはあるが、本調査では男子の喫煙経験率は高く、実態の反映はできたのではと考える。中学生では年々、喫煙経験率が上がり、特に中学1年生から2年生にかけては、男女共に顕著な上昇がみられた。これより、小学生の段階、または中学生の早い段階の指導が重要であると考えられる。

小・中学生の各要因について、「将来たばこを吸うと思う」、「たばこの煙が嫌ではない」の設問で、男子が女子より有意に高い割合を示した。これもまた、日本社会の現状を反映したものと考えられる。また、単純集計の結果では、「分煙を知らない」小学生男女共に80%前後、中学生では男女共に90%近くと多く、「たばこに害があると思わない」小学生は男女共に10%前後、中学生でも男子生徒が6.0%、女子生徒が0.9%と高かった。以上より、小学生、中学生低学年段階からのたばこに関する教育の重要性が示唆される。金子らの研究でも喫煙したいという意識を減少させる割合は年齢が低いほど効果的であり、防煙教育は小学生を対象にすべきとしている（金子、他，2004）。藤田は、喫煙が及ぼす健康影響についての十分な知識の普及の重要性を挙げている（藤田，2006）。たばこの煙には、喫煙者の口腔・肺内に吸い込まれる主流煙と火のついたたばこの先から立つ副流煙等がある。たばこの煙は有害で依存性のある物質やその他多くの化学物質を含み、様々な健康問題を引き起こしている。喫煙者には多様ながん、心疾患、脳卒中、肺気腫等のリスクがある。非喫煙者は喫煙者の近くにいることで副流煙を吸い、受動喫煙の健康リスクを負う。また、妊婦が喫煙及び受動喫煙をした場合、低出生体重児や早産、妊娠合併症のリスクが高まる（鈴木、他，2004）。これらの喫煙が及ぼす自分及び周りの人への健康に対する悪影響について、小・中学生の段階から知識を学び得ることが重要である。

本研究の質問紙表調査では、小・中学生に「あなたは、将来たばこを吸うと思いますか？」と質問し、喫煙経験ありと回答した児童・生徒の方が喫煙経験のない児童・生徒より有意に高率に「将来たばこを吸うと思う」と答えた。この点で喫煙経験がある者が将来の喫煙者に繋がること示唆され、これが問題点であると考えられる。また、小学生で「将来たばこを吸うと思う」と回答した喫煙経験ありの児童は25.0%、中学生になると男子生徒42.9%、女子生徒33.3%を示した。法的にたばこを吸っても良いと許可される年齢に近づくにつれ、喫煙の経験する者が将来の喫煙意志に、より関連することが示唆される。北山は大人になってからの喫煙を開始する者はごくわずかであり、ほとんどが子どものときに開始された喫煙行動が止められず継続しているに過ぎないとしている（北山，2005）。なお、「あなたは、将来たばこを吸うと思いますか？」という設問は、現在、未成年の喫煙防止対策の効果を評価する指標として広く認められているものであり（藤田，2005）、対策を行った場合の追跡調査の有効な指標と考える。

小学生の男女共に「たばこの煙が嫌ではない」割合は、喫煙経験のある児童と喫煙経験のない児童との間に有意な差は見られなかったが、中学生になると女子生徒で喫煙経験のある生徒は喫煙経験のない生徒に比べ有意に高くなった。中学生の喫煙経験は、小学生より回数・本数共に大きいものである可能性があり、より慣れが出てくるということなのかもしれない。

喫煙経験のある児童は喫煙経験のない児童に比べて、「分煙を知らない」と答えた割合が有意に低かった。喫煙経験のある児童は、分煙等たばこに関する知識は持っていることが示された。しかし、「たばこに害があると思わない」と答えた割合が高く、正確な知識を持っているとは言えない。喫煙経験のある児童の知識の高さは好奇心によるものと考えられ、ここでは正確な知識を持たせる教育の重要性が示唆される。また、中学生では、男女共に「分煙を知らない」と答えた割合が、喫煙経験のありの生徒と喫煙経験なしの生徒の間で有意な差は認められなかったが、喫煙経験のある女子生徒では「たばこに害があると思わない」と答えた割合が、喫煙経験のない生徒より有意に高い割合を示した。これより、正確な知識を持っていないため、喫煙が身体に与える害に対する意識が低いという問題が示唆される。

家族の喫煙については、父親の喫煙率については喫煙経験のある児童とない児童では有意な差が認められなかったが、母親の喫煙率については喫煙経験のある児童の方がいない児童より有意に高かった。父親については、日本において成人男性の喫煙率が50%を越えて一般的であり、差が生じなかったと考える。一方、母親は小学生には影響を与えていることが示唆された。また、中学生では家族の喫煙影響は、父親の喫煙が男子生徒の喫煙経験に影響が見られ、喫煙経験がある生徒の父親の喫煙率は喫煙経験のない生徒の喫煙率より有意に高かった。小学生の喫煙経験には母親の影響が強く、中学生の喫煙経験には父親の喫煙が関わり、家族の喫煙は小・中学生の喫煙経験に関連しており大きな問題といえる。また、喫煙経験のある小・中学生の方が喫煙経験のない小・中学生より、喫煙する友人がいると回答した。女子生徒に顕著な差が見られたため、特に女子生徒に対する友人の影響は強いことが示唆される。喫煙経験のある小・中学生を増やさないためにも、地域ぐるみの教育、例えば、親については職域（草野、2002）やPTAを通じた教育が重要であると考えられる。

生活習慣の面から検討してみると、喫煙経験のある児童は「朝食を毎日食べる」割合が喫煙経験のない児童に比べて低かった。この関連は中学生男子でも見られた。朝食摂取の習慣が身につけていない小・中学生で喫煙を経験する者が多いことが示唆される。朝食の摂取が不規則になる理由として、生活習慣の夜型化によって就寝時間が遅くなり、それ故に起床が遅くなり朝食を取る時間がなくなるといった報告がある（阿部、他、2002）。これより、適切な就寝時間に寝ること、朝食を毎日摂取する等の望ましい生活習慣が確立されていれば、喫煙経験の防止に繋がる可能性が考えられ、生活習慣の指導も必要であろう。

児童・生徒が受動喫煙等のリスクを負わないためには親の配慮が重要である。本調査での小・中学生の親は受動喫煙に対してどのような配慮を行っているのかについては、喫煙している小・中学生の父親は、「公共交通期間では禁煙席を利用」、「飲食店では禁煙席を利用」、「たばこを吸う人との同席・隣席を避ける」の項目で、喫煙していない父親より有意に実施している割合が低かった。一方、喫煙している母親は「たばこを吸う人との同席・隣席を避ける」の項目のみで、喫煙していない母親より有意に低かった。家族の行動が父親に左右される可能性があり、喫煙している父親は喫煙していない父親よりも、受動喫煙に対する配慮ができていない

ことが示唆され、このような面からの親の教育も必要であろう。

また、たばこの健康への影響については、小・中学生の父親ではたばこが「健康に悪い影響があると思う」割合が、喫煙者の方が非喫煙者より有意に低く、行政への要望に関しても、小・中学生の父親において「公共施設での禁煙を望む」、「禁煙相談を望む」割合が喫煙者は非喫煙者と比較して有意に低かった。喫煙者の父親の喫煙に対する意識の低さの解決も課題である。

結論として、小・中学生の喫煙に対する指導・教育は早い段階から実施する必要性が示唆された。ひとつの町において、児童・生徒を取り巻く喫煙に関する環境の改善にあたり、基本として学校教育だけではなく、地域ぐるみの教育や職域、PTAを通じた親の教育も必要であるといえる。それには、保健所が町の協力を得つつ、主体的に実施する喫煙対策の体制づくりが必要であろう。

【参考文献】

- 安部奈生, 芝木美沙子, 笹嶋由美 (2002) 小学生の血圧、肥満と食行動に関する調査, 学校保健研究, 44, 1, 14-21.
- 藤田信 (2005) 一保健所管内の小・中学生を対象とした喫煙行動と関連要因に関する大規模調査研究, 厚生指標, 52, 2, 14-22.
- 藤田信 (2006) 一保健所管内の小・中学生を対象とした喫煙行動と関連要因に関する大規模調査研究 (第2報) 一 小・中学生を対象とする禁煙外来のあり方について一, 厚生指標, 53, 11, 25-33.
- 金子教宏, 大国義弘, 井上明, 本島新司 (2004) “あなたは将来タバコを吸いたいですか?” という質問に対する、日本と米国における子供たちの反応の違いと禁煙講演の効果, 臨床呼吸生理, 36, 1, 41-44.
- 北山敏和 (2005) 未喫煙防止活動を学校で広げるにはどんな問題を克服すべきか, 保健医療科学, 54, 4, 326-329.
- 厚生統計協会 (2007) : 第1章 健康増進と生活習慣病対策, 第3編 保健と医療の動向, (4) たばこ, in 国民衛生の動向, 東京, pp.84-87.
- 草野つぎ, 長澤脩一, 角田正史, 田中正敏 (2002) 地域職域連携保健活動の実践 —ヘルスアセスメントを活用した事業所におけるタバコの健康教育の試み—, 福島県保健衛生情報, 12, 1, 2-5.
- 鈴木礼子, 鈴木恵子, 草野つぎ, 長澤脩一, 根本初江, 七宮ひろみ, 上野文彌, 角田正史 (2004) 乳幼児を持つ両親の喫煙 —乳幼児診断におけるアンケート調査から—, 福島県保健衛生情報, 13, 2, 23-27.
- U.S. Department of Health and Human Services (1992) : Health Promotion, 3. Tobacco, In : Healthy People 2000. Summary Report, Jones and Bartlett Publishers, Boston MA, pp.57.